

## 青木洪「メインメニュー」論：桂鎔黙「白痴アダダ」 との比較より

河内, 重雄  
北九州市立大学文学部：准教授

<https://doi.org/10.15017/1809196>

---

出版情報：語文研究. 120, pp.14-32, 2015-12-25. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 青木洪「ミインメヌリ」論

— 桂鎔黙「白痴アダダ」との比較より —

河 内 重 雄

## 一 本稿の狙い

本稿では、桂鎔黙「백치 아다다」(邦訳は「白痴アダダ」、『朝鮮文壇』(一九三五年九月))との比較を通して、青木洪「ミインメヌリ」(『中央公論』昭和十七年二月)からいかなるメッセーヂをくみ取ることができるかを検討する。

復刻版の青木洪『耕す人々の群』(平成十二年九月 ゆまに書房)の解説によると、青木洪の本名は洪鐘羽。一九〇八年、朝鮮黄海道黄州の生まれである。「ミインメヌリ」の舞台である朝鮮の清津にいた頃、土方をしながら左官も覚える。後に「内地」に渡航し、九州、大阪、東京で左官をしながら文学を学ぶ。東京で執筆活動を続け、「東京の片隅で」(『文芸首都』昭和

十三年六月)、『耕す人々の群』(昭和十六年八月 第一書房)、「ミインメヌリ」などの小説を発表。いつ朝鮮に再び戻ったのか、はっきりとした日付けは不明だが、一九四二年十一月には朝鮮の兼二浦製鉄所に入社していることが確認されている。一九四一年八月刊行の『耕す人々の群』にもこの製鉄所が出てくることから、「内地」にいる間も、朝鮮に強い関心をもち続けていたことが分かる。

作者の青木洪は朝鮮人である。しかしながら、「ミインメヌリ」を含め、小説は青木洪という日本名で発表しており、日本語で『中央公論』などの日本の雑誌に書いている。そして、一九四〇年頃は日本国内で朝鮮ブームがあり、「内朝一体」が謳われていたことなどから、朝鮮を舞台とする小説「ミインメヌリ」を日本文学と考えることは可能であろう。

本稿で「ミインメヌリ」と比較するのは、桂鎔黙「白痴アダダ」である。「ONE KOREA 翻訳委員会」編『そばの花の咲く頃』（平成七年十月、新幹社）の年譜によると、桂鎔黙は一九〇四年、平安北道宣川郡の生まれ。一九二八年に東京の東洋大学哲学科に入学するが、一九三一年に破産により学業を中断、帰国している。「白痴アダダ」は帰国して四年後に朝鮮で書いた小説である。なお、小説はハンゲルで書かれているが、『そばの花の咲く頃』に優れた日本語訳があるので、以下引用は同書収録の「白痴アダダ」による。<sup>(注1)</sup>

青木洪と桂鎔黙は年齢も近く、日本にいたことがある点も共通する。「ミインメヌリ」は一九四二年に発表、一九二八年頃の朝鮮を舞台とし、「白痴アダダ」は一九三五年の発表で、その頃の朝鮮を舞台としている。両作品とも「白痴者」が重要な役割を演じ、朝鮮の近代化、資本主義化を主要なテーマとする点も共通している。植民地朝鮮の近代化を大枠のテーマとして共有しているため、「ミインメヌリ」を「白痴アダダ」と比較するのは有効と言えよう。

次章では「白痴アダダ」について述べる。「白痴アダダ」では、貨幣や田畑が近代化におけるキーワードとされている。これらの制度が現地の人々の内面・精神にどう影響したのかを、小説の記述に即して考える。三章では次章での検討を踏

まえ、「ミインメヌリ」について述べる。「ミインメヌリ」では工場、学校、港、特に鉄道が、近代化のキーワードとされている。これらの制度と人々の精神の関係について考察し、四章で比較の結果をまとめる。

## 二 前近代的精神を大切にしようとする

### 「白痴アダダ」

「白痴アダダ」は、アダダと呼ばれる無欲で献身的な「白痴」の女性を主人公とする、三人称の小説である。アダダは土地持ちの名家の娘だが、「白痴」で「啞」であるため、近隣ではアダダを嫁にする者はいなかった。そこで、アダダの両親は田一石分を付けることで、アダダを嫁に行かせた。貧しかった婚家は、アダダによって食べていけるようになったため、最初のうちは彼女を大切にした。しかし、田一石の元手によって生活に余裕がでてくると、夫は妻のアダダに暴力をふるうようになった。家庭に不満を抱いた夫は家を飛び出し、西洋の雑貨等（ヤンファ）や銀鋳事業（ウンテル）の投機に賭けて大金を手にし、金につられる女たちの中から一人を妻に選んで帰ってきて、アダダを追い出してしまった。アダダは実家に戻るが、家事で失敗ばかりするため、母からふるわれ

る暴力も日増しにひどくなる。実家にもいられなくなつたアダダは、唯一自分に優しくしてくれるスロンという男の妻となり、二人で村を離れて身彌島シニミヤジマで暮らすことにする。スロンがアダダを妻にした理由は、アダダであれば金で買わずとも妻にできるため、これまで貯めた百五十円で畑を買えると思つたからである。百五十円の金を見せられ、明日にでも畑を二千坪買う、儲けることができるはずだという話を聞かされたアダダは、スロンが前の夫のように金が増えるにつれて冷たくなるのを恐れ、朝早くにスロンのお金を全て海に捨ててしまふ。思いがけずその場にやつて来たスロンは、慌てて金を取り戻そうとするが、金は全て波にさらわれてしまふ。怒つたスロンはアダダを海に突き落とし、アダダは水の中へと消えていく。物語は以上のように要約できよう。

「田一石の元手」により、「数百円の金が目の前に転がるようになると、アダダに暴力をふるうようになり、銀鋳事業などの投機の「賭け」によつて「二年の間に二万円近い金を手にし」、「金につられるあまたの女の中から心かなう者を選んで家に帰つて」くる夫。「アダダで満足できるわけではないけれど」、「ただで手に入る妻ならば」かまわないと思つてアダダを妻にし、妻を買うために貯めていた百五十円で畑を二千坪買い、粟を植えて何年か頑張れば「また田が手に入る」と

考えるスロン。スロンが畑を買えば、「その畑でとれる穀物は年々金を増やし」、スロンは「金が増えるにつれだんだん目がくらみ、しだいに情は遠のいていく」ことを恐れ、スロンの金を捨てるアダダ。アダダが金を海に捨てる時、「一円札、五円札、十円札、冠をかぶつた多くの年寄りたちが俺を虐待するではないぞとばかりに、いっせいににらみつける」が、本作では資本としての貨幣、金儲けのためのお金が、解釈上の鍵となつている。

そもそも一円札や十円札といった貨幣が朝鮮で使用されているのはなぜであろうか。金斗宗『韓国貨幣整理』と植民地金融（金通）には次のような指摘が見られる。

新領土に植民地は、概して従来の資本主義的生産方法の発展をみることなく停滞してきた社会であるが、この社会をその自然的発達の段階にとどめ、そこに蓄積された金銀財宝を掠奪することによつては、もはや資本の要求はかなえられるものではない。（略）

日本の朝鮮への進出は一八七六年の江華島条約をもつてはじまるが、これを嚆矢として、日清戦争（略）、日露戦争（略）を経て、一九一〇年に朝鮮を併合し、ここに植民地化の完成をみるに至る。これらの時期に、あるいは

継続して、日本資本主義の朝鮮における収奪遂行のための基礎工事がなされるのは、けだし当然のことといわねばならない。一九〇五年に始まる所謂「韓国貨幣整理」、一九一〇年に始まる「土地調査事業」、これである。前者は、自己の商品流通を円滑ならしめ、貨幣的に朝鮮を日本資本主義に従属せしむるものであり、後者は、植民地社会の私的土地所有の確認を目的とするものである。(略)当局は韓国人民の抵抗を打ち崩し、一九〇九年一月には、「貨幣整理」は一応の成果をみるにいたったのである。かくて、日本帝国主義による朝鮮支配の初発的基礎工事は完了した。日本帝国主義は、自由に朝鮮で資本を創出することができ、その資本を自己に有利なように使用しうるようになった。これらの資本を搾取対象である朝鮮人民に媒介するものとして、朝鮮人民を否応なく商品経済の渦中に巻き込むべく生まれてくるのが、植民地金融機関である。

一円札などの貨幣は、植民地朝鮮に日本資本主義を根付かせ、大規模な資本主義の商品経済に人民を巻き込むものと、まとめることができる。なお、引用には一九〇九年に「貨幣整理」は一応の成果をみるにいたった」とあるが、羽鳥敬彦

『朝鮮における植民地幣制の形成』<sup>(注七)</sup>は次のように指摘している。

一九〇二年に初めて日本側の銀行である第一銀行朝鮮内支店は第一銀行券を発行し、〇五年に無制限法貨として認められた。ついで、〇九年韓国銀行の設立とともに、第一銀行券が同行に引き継がれ、さらに「併合」の年(一九一〇年―筆者注)には韓国銀行券も発行された。ところが、その翌年「朝鮮銀行法」の発布・施行によって同行は朝鮮銀行と改称することとなったため、一九一四年から一五年にかけて、一円・五円・一〇円・一〇〇円の各種朝鮮銀行券が発行され、漸次それまでの銀行券にとつて代り、ここに植民地朝鮮の幣制整備が完了した。(略)実態的にみて、植民地幣制は本国通貨との一定の固定的・持続的な等価関係を植民地通貨がもつにいたったとき、いちおう完成するということができる。そして、このことが経済活動に及ぼす端的な効果としてまずあげられるのは、本国・植民地間の経済的交流がはるかに進む可能性をもつということであろう。すなわち、植民地の貨幣と本国のそれとが固定的にリンクしているのであれば、そうでない場合と比べて、商品、資本さらに経済的資源としての人間の移動はより容易となる。

植民地貨幣が日本の貨幣と一定の等価関係をもつことで、朝鮮が資本主義経済に強力に取り込まれてしまふのは、一九一〇年代半ば頃から考えられる。一円、五円、十円、百円の各種朝鮮銀行券には、「白痴アダダ」の表現を借りると、「冠をかぶった」「年寄り」がそれぞれ印刷されている。アダダが捨てた紙幣は、朝鮮銀行券と考えてよい。本国・植民地間における貨幣制度の固定的リンクによる、近代的な資本主義経済が本格的に始まったと言えよう。

植民地貨幣が機能するようになり、私的土地所有が確認されると、米や穀物は資本的商品（利益を上げるための商品）として扱われるようになり、生産様式も近代的なものとなる。前掲の『韓国貨幣整理』と植民地金融』は、商品としての米について、次のように述べている。

米価の高騰はいきおい社会不安を急激に醸成し、ついには一八年七月富山県下にはじまった「米騒動」となって日本の支配階級を震撼させた。

日本における米価高騰は、朝鮮米に対する需要を喚起し、その価格を急騰せしめた。（略）

（略）田が後に増勢に転じたのは開墾・干拓などによるものであった。こうして、米穀生産は増加してゆく（略）。

一〇〇一六年平均の生産高指数を一〇〇とすると、二四〇〇年平均は一二五と、およそ三〇〇万石増加している。この期間における耕地面積の増大、米穀生産の増加は、米穀商品の価格面での有利さが支えとなっていた。より厳密にいうならば、朝鮮米の生産費が日本産米のそれに比べてはるかに低廉であったにもかかわらず、日本の米穀市場で日本産米に準じて取引されたからであった。その結果、朝鮮米はその生産費と分離することとなり、その差額だけ余分に朝鮮における地主・米穀商人の利益となった。

一九三〇年頃の朝鮮の米が、商品として有利であったことがうかがえる。「白痴アダダ」は前述のように、一九三五年頃の朝鮮が舞台である。その五年前、即ち一九三〇年頃に、田一石分つきでアダダは嫁に行き、約五年で追い出されたときれている。婚家では「年を重ねるにつれ、暮らしを支えていた田一石の元手が徐々に彼らを余裕のある生活へと導き、数百円の金が目の前に転がるようになった」というのもうなずける。無論、米は一九三〇年以降も高い商品性を保ち続けた。鄭在貞氏の労作『帝国日本の植民地支配と韓国鉄道』<sup>(注)</sup>には次の一節がある。

植民地時代末期の米の輸送は植民地時代初期より14倍程度に増えた。増加幅が特に大きかった時期は1915、1919、1927、1931、1933、1937年の前後だった。この時期には日本への米の移出も急激に増えた。(略)

年度によって増減はあったが、1931年からは日本経済が恐慌を抜け出し始め、韓国産米の豊作が続き、米の荷動きは顕著に増加する傾向を見せた。特に戦時体制へ移行し始めた1937年には、日本へ移出するために開港地に到着する米穀輸送が極めて盛んだった。(略)

肥料輸送が激増した時期は1917～1919年、1927～1929年、そして1933年以後であった。この時期に肥料輸送が激増したのは米の日本への移出が増加したり、産米増殖計画<sup>(注6)</sup>の影響で農村で金肥を多く使ったためである。

一九三〇年代半ば、つまり、アダダが実家からも追い出され、スロンと一緒に買った頃は、米は特に儲かる商品だったと言える。スロンが畑を買った時に、アダダが首を横に振るのを見て、スロンが「それじゃ、田んぼを買おうって言うのか?」、「ふん! 田んぼがいいってことはお前も知っ

ているんだな!」などと言うのは、このような朝鮮の資本経済と無関係ではあり得ない。

スロンは畑を買い、粟を植えようとする。米以外の作物の中では、粟は当時、最も儲けになる畑作物の一つであった。時期は少し後になるが、許粹烈『植民地朝鮮の開発と民衆』<sup>(注7)</sup>の「(図2-15) 殖産物の作物別生産額構成(1940年)」によると、粟は大麦や大豆と並んで、極めて高い生産額を占めている。粟の商品的価値が高い理由については、次の『帝国日本の植民地支配と韓国鉄道』(前掲)の引用が参考になろう。

1910年代後半から粟の到着がこのように激増したのは、日本への米の移出のためだった。韓国人は米の移出による食糧不足を埋め、また米価の高騰に対処するために仕方なく満州粟を多く購入したのである。(略)

米の移出に伴う代用食糧として韓国人が常用し始めた満州産粟は、米の移出量に比例して1920年代から輸入量が激増し始めた。そして輸入粟の80%程度は京義線・京釜線・湖南線などを通じて全国の消費地に運ばれた。満州粟の輸送は1927年に35万トン余りで絶頂に達し、1930年代後半は15万トンを維持した。

米の輸出用商品としての性格が強くなるにつれて、粟が主要な食料の一つとなり、朝鮮内部で消費されるようになる。引用は鉄道貨物に関する記述であるため、満州粟についてのみ述べられているが、朝鮮での粟の生産額が高かった理由も、内部への食糧供給のためと考えられよう。スロンは畑に粟を植え、自分たち二人の食糧にあてるとともに、粟による利益によっていずれは田を購入できると考えている。その背景には、以上のような、粟の商品的価値の上昇があったのではあるまいか。

貨幣制度の再編による経済の近代化は、人々の精神に資本への執着を植え付けたと考えられる。新制度は時に、人々の内面に変化を生じせしめる。アダダの前の夫もスロンも、資本のために愛してもいないアダダと結婚し、資本ゆえにアダダを追い出し、死に至らしめた。申明直氏は「植民地朝鮮においての都市小市民の結婚および家族文化について」<sup>(註8)</sup>で次のように述べている。

旧女性の目で見た新式教育を受けた「男(夫)」と「新女性」の関係というのは、「愛」に先立って「お金」だった。近代を支えている「貨幣」を「愛」より優先していることを「旧女性」の目を通して見せている(作品4)。

旧女性が「最後の勝者」になったことも、彼女は近代が見せてくれた貨幣の魔術から自由だったためである。

資本のための結婚を否定するアダダは、「最後の勝者」にはなれなかった。しかしながら、夫がアダダにふるう暴力を「あまりにも酷い」とするなど、語り手だけはアダダの言動に対し、一貫して同情的である。植民地貨幣制度、近代化によって変わることにない愛情を求めるアダダは、古き良き前近代の精神を象徴していると考えられる。

何かが変わりつつある時には、その変化との対比によって、これまでいかなる状態であったのかということが意識され、古き良き昔として語られることが少なくない。「白痴アダダ」は、無欲で献身的な「白痴者」アダダに前近代の精神を象徴させることで、近代的な諸制度によって変わりつつある人心に対し、警鐘をならししているとまとめられよう。

### 三 前近代的精神を変えようとする 「ミンヌスリ」

「白痴アダダ」は、植民地貨幣などの近代的制度によって、変化が生じた(あるいは変わらなかった)人々の精神を描いてい

る。この点、「ミインメヌリ」も同様と言える。

「ミインメヌリ」は、五年ぶりに日本から朝鮮の清津に帰ってきた「私」を主人公とする、一人称の小説である。ミインメヌリとは、将来成人した時に息子と婚姻させるために、未だの姑が育てる十歳から十二歳くらいの女の子のこと。結婚できる年頃になると、一旦お金をもたせて女の子を実家に戻すため、この制度には売買婚的な性格があると言われている。清津の街が開港二十年を迎えたことあり、清津における開港は一九〇八年であることから、時間設定は一九二八年頃と考えてよい。

五年ぶりの清津は、様々な工場や貿易商ができ、学校も増え、長足的に発展していたため、「私」は内心大いに喜びを感じる。貧しかった姉一家の暮らしも以前ほどひどくはない。姉一家に身を寄せた「私」は、八年前にミインメヌリとして百円の身代金で夫・夏燮の姑に連れて行かれた姪のエツプニのことを思い出す。姉の長女であるこのエツプニは、夏燮の正式な嫁となった今日もなお、ひどい目にあっているという。「私」は甥の炳黙（エツプニの兄）とともに、鉄道を利用してエツプニに会いに行く。久しぶりに会ったエツプニに、「私」は里帰りを勧めるが、エツプニの姑が悪く勘ぐってなかなか承知しない。「私」はなんとか里帰りを承知させ、駅までの道す

がら、エツプニから生活の悲惨であることを打ち明けられる。

姑の言いつけでエツプニを監視するために追ってきた、エツプニの夫で「白痴」の夏燮も連れて、「私」はエツプニとともに姉の家に戻る。その夜、エツプニは両親に対し、自分は夫の夏燮から斧で虐待されている、みんな自分を売ったお金で生きてきたのではないかなどと恨みをぶつけ、入水自殺しようとするが、「私」によって一命をとりとめる。次の日の晩、鞭を持って獰猛な形相で、嘘をついてまでエツプニを連れ戻そうとする夏燮を、「私」は叩き出してしまふ。数日後、村民をかり集めてやって来た夏燮は、エツプニの髪をつかんで牛車に引きずり上げ、網でがんじがらめにし、挑みかかった「私」を袋叩きにして、エツプニを連れ帰る。「をじさんの前途にはもつと大きな理想がある筈ぢやないか。その理想を犠牲にするほど、小さな女一匹にこだはる馬鹿ないぢやないか」と非難する炳黙に、「私」は「お前には自分の肉親を犠牲にするほど大きな理想があつたのか。お前の頭は凡そお前の親代の古い考へとちつとも変りない」と答え、「男尊女卑」とそれを支える婚姻制度（ミインメヌリ）の根深さを痛感する。物語の要約は以上である。

「白痴アダダ」では、商品としての米や貨幣が近代化を表すものとして描かれていた。「ミインメヌリ」では工場や学校、

港が朝鮮の近代化を表している。

が、この清津と別れて五年ぶりに再び見る私は、その発展ぶりに秘かな欣びを感じた。以前に見られなかつたいろんな工場が出来、大きな貿易商が出来、人家や学校が増え、市街はすべて一変して、工業化され商業化されてゐた。この長足的発展に依つて、彼等住民の生活がどんなに潤はされてゐることだらう——と私はほほえんで眺めたのであつた。それに相応しく清津は北鮮第一位に数へられる海港都市でもあつた。

「ミンメヌリ」ではこの他に、鉄道を近代化の要素として挙げる事ができる。この小説では、「私」やエツプニが鉄道を利用するほか、エツプニの兄・炳黙は鉄道員、エツプニの父は鉄道機関区で石炭搬夫をしており、エツプニも夏は線路の草むしりをするなど、登場人物たちがそれぞれ鉄道に関わっている。小説の最後で、炳黙が「私」に対し「理想」を云々するのも、鉄道（それによって象徴される近代化）が関係すると考えられる。

羽鳥氏は前掲の『朝鮮における植民地幣制の形成』で、日本が「鉄道・道路・港湾建設」といったインフラストラクチュ

アの整備」を急いだのは、「資本を誘致するため」、「地方への支配を浸透させる」ためと指摘している。鉄道はこの他にも様々な有形無形のもの運んだと推測される。

日帝時代の韓国社会の全体像を描き出すにあたって避けられない分野の一つが鉄道だと考える。なぜなら帝国日本が敷設・運営した鉄道は、韓国の政治・経済・社会・文化のあらゆる面で近代性と侵略性を同時に内包していた、時代の寵児だったからである。すなわち日帝時代の韓国鉄道は、帝国主義侵略の楨杆こうかんとして抑圧と収奪の機能を担った反面、全国津々浦々に文明を伝播することによつて近代社会をつくり出す役割も果たした。

（前掲『帝国日本の植民地支配と韓国鉄道』より）

「文化」や「文明」、つまり近代社会に相応しい価値観や道徳なども、鉄道や学校によつて広められたと考えられよう。炳黙などの考えが前近代のままであることを批判することなどからも、「ミンメヌリ」の「私」が街の発展を喜んでいたことには、人々の精神的な発達への期待もあつたのではあるまいか。

ところで、「ミンメヌリ」の舞台である清津に鉄道ができ

たのは、いつ頃のことか。『帝國日本の植民地支配と韓国鉄道』(前掲)には次の一節がある。

咸鏡線の敷設問題が日本で現実的課題として登場したのは日露戦争を前後した時期であった。実際に、日本は戦争中(1905年)に清津―会寧、清津―羅南、西湖津―咸興に600mm軌間の軽便鉄道を敷設して兵站輸送に利用していた。そして戦争後、日本はこの鉄道を民間人に払い下げて一般旅客や貨物の運送を担当させた。(略)

日本が咸鏡鉄道を敷設しようとしたのは、軍事的侵略と経済的収奪を新しい次元で積極的に進めるためだった。日本は咸鏡線を通して咸鏡南北道地方の無尽蔵な石炭や森林を開発し、世界4大漁場の一つと呼ばれた咸鏡南北道沿海の水産物を搬出することで燃料難や食糧難を解決しようとして画策した。さらに咸鏡線を東北満州の真ん中を横貫する吉会鉄道と連結させ、満州内陸とシベリアに対する日本の進出を円滑に進めようとした。それだけでなく、吉会鉄道は咸鏡線の終端港駅である清津・羅南・雄基などを通して、東海を経て日本と最短距離で連結することができた。(略)

朝鮮総督府が推進した咸鏡線の建設工事は、南部(元

山々郡仙、1914・10―1928・1)と北部(郡仙、会寧、1914・10―1927・12・1)に分けて実施されたが、両者ともに着工して15年で完工した。(略)

咸鏡線が完工し、(地図3-13)に見られるように、ソウルと大田を基本軸として、朝鮮半島の四隅に広がっていく「X」型の幹線鉄道網が完全な姿を整えるようになった。よく韓国の5大幹線鉄道と呼ばれる京釜線・京義線・湖南線・京元線・咸鏡線がそれである。

小説に出てくる清津や会寧は、咸鏡線の北部にある。一九〇五年の時点で、一応清津―会寧間には鉄道はあったようだが、メインと言える南北の咸鏡線が完成したのは、「ミインメヌリ」の時間設定と同じ一九二八年。エツプニの住む家は、清津から咸鏡線で北上し、会寧の手前で降りた辺りの「小部落」にあるとされている。エツプニが夏になるとしているという草むしりの仕事も、咸鏡線の線路でのものであろう。ちなみに、「白痴アダダ」の舞台と考えられる宣川郡は、京義線上にある。

無論、この咸鏡線の完成をもって、朝鮮における鉄道計画は終わった訳ではない。咸鏡線の完成は、新たな計画のスタートでもあった。

朝鮮總督府は1926年の第52回帝國議會の協賛を得て「朝鮮鐵道12年計畫」を確定した。この実行期間は1927年から1938年までであった。朝鮮總督府が1920年から実施した「朝鮮産米増殖計畫」とあわせ、代表的な産業政策の一つであった。この鐵道政策の核心は大村鐵道局長の次のような言葉によく要約されている。

朝鮮に於ける産業の開發は独り半島二千万の民衆を安定せしむる所以なるのみならず、帝國の人口食糧及び燃料問題を解決し、現時の輸入貿易を轉換せしめ得るもの亦少なからず。(略)

朝鮮總督府は、名分上は鐵道建設が韓國の産業開發と生活上の前提条件だと標榜したが、究極的な目的はあくまでも日本人を韓國に送出し、韓國から食糧や燃料を搬出することで貿易収支の悪化を保全するためだった。(略) 日本政府の積極的な支援を受けて、朝鮮總督府が精力的に推進した「朝鮮鐵道12年計畫」は、予定期間より1年遅れて東海線と慶全線の一部を除きほぼ完成した。(略) 日本が「朝鮮鐵道12年計畫」期間(略)に新たに建設した満浦線・恵山線・図們線・慶全線・東海線と、国有化

した私設鐵道、そして1940年を前後して敷設した中央線は、鉄・石炭などの鉱産物と木材・燃料などの林産物および米・綿花などの農産物を沿海の新興工業地帯や日本に搬出し、韓國と滿州の国境地帯を開発して日本と連結させることによって、国防と警備を強化する機能を担った。(前掲『帝國日本の植民地支配と韓國鐵道』より)

「ミインメヌリ」の設定時間の前年一九二七年に始まった「朝鮮鐵道12年計畫」で、新たに建設された図們線は、北部咸鏡線の会寧からの延長である。重要なのは、この計畫は建前理想としては、朝鮮の産業の發展のため、民衆の生活の安定のためとされていた、ということだ。時期的に見ても、鐵道員である炳默ヒョムモクが云々する「理想」は、鐵道のさらなる充実による産業の一層の發展と考えられる。より徹底した生活の近代化と言い換えてもよい。なお、「ミインメヌリ」は一九四二年の発表であるため、一九二八年以降の鐵道について付言すると、一九三〇年代の咸鏡鐵道は、清津などの特に工業的發展の要となったと言える。

工業化が進めば、それに比例して石炭の消費も増える。『帝國日本の植民地支配と韓國鐵道』には次のような指摘が見られる。

石炭は植民地時代の全期間を通して鉄道貨物の最大部分を占めた。石炭の輸送経路は日本・韓国・満州の需給関係の中で形成された。1930年代半ば以前は、満州産石炭が韓国に輸入されるのが基本的な需給関係だったので、京義線・京釜線を通じて平壤・鎮南浦・ソウル・大邱などの大都市と鉄道沿線に運搬されるのが主な輸送経路だった。一方、日本への移出のために韓国産無煙炭が満浦線・京義線→鎮南浦港、咸鏡線→清津港へ輸送される経路と、日本産石炭が移入されて、仁川港→ソウルへ輸送される経路が副次的な輸送経路であった。(略)

1930年代後半の韓国の石炭自給率は50%程度であった。残りは満州や日本からの輸移入炭、特に日本炭で充当した(30%)。1940年代前半の石炭自給率は63%だった。これに伴い国内産石炭の地域間輸送が増加したが、満州・日本を相手にする輸送経路はそのまま維持された。1930年代以後、国内の石炭消費量が工場用が50%を超えたのは、この時期に植民地工業化が活発に推進されていたことを反証するものだった。

小説ではエツプニの父「私」の義兄が石炭搬夫とされている。その鉄道や工業の急速な発展からも、清津での石炭消費

量は特に多かったと推測される。エツプニの父親の設定から、読者は清津の鉄道だけでなく、工業の発展をも意識し得たのではあるまいか。

これまで登場人物の設定などから、清津の鉄道と産業の発展について述べてきた。小説には工場や貿易商の他にも、学校が増えたとある。当然のことながら、学校も鉄道や工場と関わりがある。

このような転換点の発生は、普通学校生徒数が1920~25年と1933年以降の2つの時期に集中的に増加したと関連がある。1920年代前半に生徒数が急増するようになったのは、3・1運動が日帝の教育政策の基調を変えたからだけではなく、朝鮮人自体の近代教育観も急変したためである。前者に対しては、1922年の第2次「朝鮮教育令」の公布、また後者については1920年以降の書堂生徒数の減少趨勢を見れば理解できる。したがって少なくとも1933年に至るまでの普通教育の拡大は、朝鮮総督府の意図によってなされたというよりは、朝鮮人たちの近代教育に対するより積極的な要求がその背景にあったことが分かる。一方、1933年以降の普通学校生徒数の増加は、この時期に本格

化した鉱工業の発展と（準）戦時体制による皇国臣民の育成という日帝の教育方針の変更が最も重要な原因であった。（略）

趨勢としては、1933～34年を境に、それ以前よりはその後により高くなったが、1920年代半ば以降中等以上の教育機関の入学定員がかなり増加したにもかかわらず入学競争率がより高くなったという事実は、朝鮮人たちの教育に対する需要、特に実業教育に対する需要がますます激しくなっていることを意味する。前述した通り、近代教育機関に在学する生徒たちの父兄が、身分上や財産上の差別をかなり払拭していたという点、また実業軽視の職業観も大きく払拭されたという点があるが、この入学競争率表もそのような傾向が日帝時代により拡がって行ったと理解させてくれる。（略）

参考に、鉄道局の職制は最末端の試用から局長に至るまで、多くの段階で成り立っている（略）。試用は鉄道局員とは見なされない最末端の労働者たちであった。一般募集で充員し、基本的に学歴制限はなかった。一般に備人以上を鉄道局員と呼んでいた。備人は鉄道局員の中で最末端であり、試用から充員されたり小学校卒業程度の学歴を持つ者から一般募集で充員された。雇員は備人か

ら昇進によって充員されたり、中等学校あるいは実業学校出身者の中から一般募集で採用されたりした。この雇員の一部は、鉄道手に昇進したり、書記（事務職）あるいは技手（技術職）に昇進した。試用や備人から出発した人々は、概して雇員あるいは鉄道手が昇進の限界であった。

鉄道手以上の職級にある人々は「職員」と呼ぶ。『職員録』にはこの職員だけが収録されているのである。書記と技手は雇員や鉄道手から昇進によって充員されたりしたが、残りの一部は専門大学出身者たちで充員された。高等官への昇給においては、帝国大学出身者が圧倒的に多く、時には帝国大学出身者の中から直接充員されたりした。（前掲『植民地朝鮮の開発と民衆』より）

韓国人従業員数は1930年代まで全従事員の40%程度で固定され、彼らのほとんどは最末端の備人身分だった。韓国人の中で判任官以上の中堅管理はごく少数であった。雇員さえも時期によって違いはあったが、全雇員の27%にすぎなかった。鉄道学校や従事員養成所出身の韓国人も全卒業者の11～24%にすぎなかった。（略）

韓国人は部署配置と職種を選択でも差別待遇を受けた。（略）韓国人のほぼ全員が現業の第一線、すなわち駅・機

関区・保線区・工場などの現場で勤めた。したがって韓国人は、鉄道運営を総合的に企画・監督する中枢部署から基本的に排除されていた。

鉄道従事員の技術分布でも民族別優劣は著しく現れた。韓国人の大多数は「駅手・炭手・火夫・機手・線路工夫・技工」など、主に現業の一線で単純業務ないしは下級技術労働に従事した。（『帝國日本の植民地支配と韓国鉄道』より）

鉄道組織の上層部は日本人が占めていたとはいえ、組織の朝鮮の人々の間に学力主義があつたことは事実であろう。思想や道徳性ではなく実業性重視の、言い換えれば物質面での近代化を目的とした、出世のための教育である。<sup>（注9）</sup>小説の登場人物たちを二つの引用の職制に当てはめると、「鉄道員」であるエツプニの兄・炳黙は「駅手」で「傭人」、「石炭搬夫」のエツプニの父も「炭手」で「傭人」。夏に線路の草むしりをして、「線路工夫達」（傭人）にからかわれているエツプニは最末端の「試用」となろうか。エツプニもその兄も父も、その生活状態や、当時の朝鮮における就学率の低さなどから、小学校に行つたとは考えにくい。エツプニは百円で身売りして八年、草むしりの仕事も長いと考えられるが、試用から職制上一つ上の傭人に上がる気配は微塵もない。エツプニとその兄

や父と、学歴に差が無いにもかかわらず、職業上の地位に差があるのは、男尊女卑ゆえと考えられよう。

「ミンメヌリ」では、清津の飛躍的な発展、急速な近代化を喜んでいた「私」が、エツプニやその兄の炳黙<sup>ヒョムムキ</sup>、エツプニの夫の夏燮<sup>ハヤヒ</sup>やその母とのやり取りを通して、人々の内面・精神は前近代のままであることを知り、驚き憤る様子が描かれている。鉄道が充実し、工場がたち、学校が増えても、逆らわぬよう「髪のをわし掴みに」して斧で脅しつけ、金儲けや経済発展のための道具としてのみ扱うといった、女性に対する非人間的な扱い<sup>II</sup>前近代的精神は変わらない。無論、女性を非人間的に扱うのは男性に限ったことではない。小説ではエツプニの姑や、その姑の娘も、年若い女性をだまして金儲けの道具にしている。しかし、「白痴アダダ」との比較を通して気付かされるのは、この小説において最も強烈に男尊女卑を体現しているのは、エツプニの夫で「白痴」の夏燮<sup>ハヤヒ</sup>だということだ。親に言われるままに、妻のエツプニが逃げたり逆らったりしないよう斧で脅し、「それでこそ男の値打ちが立つ」と素朴に思つて疑いもしない「白痴」の夏燮<sup>ハヤヒ</sup>は、まさに前近代的精神の象徴と解せよう。「白痴アダダ」も「ミンメヌリ」も、近代的諸制度によつて変わることはない前近代的精神を、「白痴者」が象徴する点で共通している。

「白痴アダダ」では、アダダが近代化による精神面での影響を受けない（資本への執着がない）のは、無欲で猷身的な「白痴」という性質ゆえと考えられる。<sup>注10</sup>「ミインメヌリ」で鉄道や学校などの近代的諸制度が、人々により一層の近代化を望ませるのみで、男尊女卑といった前近代的精神を払拭し得ないのなぜか。次の引用は「ミインメヌリ」の一節である。

寝部屋が釜と一緒にくつついてゐる家屋構造を見ても、北鮮の人が如何に悠長に呑氣に出来てゐるかが窺はれる。釜の傍で食ひ釜の傍で寝るこの蛮的生活——また言葉の粗野や、氣性の粗暴さは、この地方の荒涼たる風土や強悪な氣候から判断することも出来る。

「蛮的生活」や風土・氣候に、斧や鞭で妻を脅しつけるような彼らの氣質がうかがえるという。ここで重要なのは、生活が精神を規定する、あるいは逆に精神が生活を規定するといった一方的なものではなく、生活・制度と精神は相互規定的だということだ。いかにも「私」は小説の最後で、「彼等の共通した『男尊女卑』のこの古い觀念は、やはり長く続いた根深い因襲（昔からのしきたりや制度）ミインメヌリ——筆者注）のせみだらうか？」などと、制度が精神よりもより根本的なものだ

思っているかのような疑問を發している。小説の最初、清津の近代化を喜ぶ「私」の様子にも、「私」が制度を重視していることがうかがえよう。しかしながら、小説の最後の「私」の疑問はあくまで疑問であり、また、小説世界における現実として、近代的諸制度（鉄道や教育）は前近代的精神を規定し得ていないのも事実である。このことについては、私たちはエツプニが夏に線路の草むしりをして、線路工夫たちにかかわれているという点に、注目すべきではなからうか。昔から続く婚姻制度ミインメヌリと結び付いた男尊女卑の精神が、すでに根強く社会全体に行きわたっているため、鉄道などの近代的制度を構築する時に、前近代的精神に基づいて構築することになるのだ。その意味で、新しい制度は、前近代の精神を変えるところか、むしろ強化する（線路工夫達からかはれながら）ことになる。前近代の男尊女卑の精神は、新制度がどのような形をとるのか（男性優位の職制）を決め、その精神は、昔からの制度（女の子を息子の嫁にするべく金で買ひ、姑が育てるため、夫・男に逆らえない）と結び付いている。「ミインメヌリ」で近代化が人々の前近代的精神を一掃し得ないのは、制度と精神の相互補完的な関係によると言えよう。

この二つは相補的であるため、どちらか一方のみを変えようとすると、もう一方によってからめ捕られてしまい、結局

は失敗に終わると考えられる。小説の最後で、「私」は「婚姻制度の是正」を口にしてゐる。しかしながら、この小説に制度の変革の主張を読みとるだけでは、一面的に過ぎる。この小説では、エツプニだけでなく、エツプニの母も、ミンヌヌリミンヌヌリの制度で悲惨な生活を強いられたと解釈することができ。以下はエツプニの母親の台詞である。

「今となつては、お前になんと言はれたつて、なんとも言へない親の心情だ……どんな親だつて好きこのんで自分の子を地獄へ突き落す親はないだろよ。わたしも十二年からお前のお父さんところへ来て、因業な姑やお前のお父さんが憎くて——里へ逃げ帰つたり、里から突き返されたり、苦しくていやであの時死なうと思つたこともあるんだ……それでもそれを我慢してお前達を産んで育てた……人間はよくなるも悪くなるも、みんな神様から与へられた運命だよ……お前の不幸も自分の運命だと思つておくれ……」

「わたしも」、「十二の年から」、「因業な姑」といった言葉から、エツプニの母親もエツプニ同様、ミンヌヌリだったと解せよう。エツプニやその母以外にも、自殺した「二人の田

舎娘」や、親たちが勝手に決めた婿を殺そうとして、半殺しにされた少女など、物同然に扱われ、辛い生活を強要される女性の姿が繰り返し描かれている。そして、そのような生活の強制を当然のこととしたり（病黙、夏燮など）、「運命」として諦める（エツプニの母や妹など）のではなく、改めるべき「野蠻」なことと見なす精神が、「内地」の「奥さん」や「内地」から帰つてきた「私」によつて示される。前近代的な精神に対し、男も女も同じ「人間」として扱うという精神＝理想がぶつけられていと言へる。若い女性たちの悲惨な生活、生活に沁みついている前近代的の精神に対し、取つて代わられるべき新しい精神＝理想をぶつけ、同時に、その理想に相応しい婚姻制度・生活へと変えるよう呼びかける。相補的であるため、前近代的な制度と精神とを同時に変える必要があるのではないかと、読者に問ひかける小説とまとめられよう。

#### 四 「白痴アダダ」と「ミンヌヌリ」の比較のまとめ

最後に両作品を比較し、共通点や相違点を明確にしたい。まず、朝鮮の制度上の近代化をテーマとする点が共通している。「白痴アダダ」では、日本の貨幣と等価関係にある貨幣

制度、資本主義的商品としての米を、近代化の要素として見出すことができる。一九三〇年代前半、朝鮮の米は日本の米より安く作れる上に需要も大きく、優れた商品性を有していた。米によって生活を救われたアダダの夫は、資本主義商品としての米によって裕福になると、もう用はないと言わんばかりに「白痴」のアダダを憎むようになり、金に執着し始める。「ミインメヌリ」では、工場や学校、鉄道の充実が、清津の街の近代化として描かれている。小説世界の時間でもある一九二八年は、さらなる鉄道の発展、ひいては産業の発展が目標とされていた。小説の最後で炳黙が口にする「理想」は、このような目標と無関係ではあり得ない。「白痴アダダ」の貨幣や米、「ミインメヌリ」の鉄道や学校は、それぞれの小説世界の時間において、端的に近代化を表し得るものと言えよう。近代の諸制度が人々の内面・精神に変化を与える点についても、同じと言ってよい。貨幣や鉄道といった制度は、資本への執着、さらなる産業的発展の希求といった、これまではなかった内面をつくり出したと考えられる。と同時に、その新たな内面との関係において、諸制度によって変わらぬ前近代的精神が見出されることとなる。「白痴アダダ」では、結婚の動機の一つとなった資本への執着心から遡行的に、今も残る献身的な愛情という前近代的精神が見出されている。「白

痴」のアダダはこの精神のもち主として、同情的に語られていると言えよう。「ミインメヌリ」では、さらなる鉄道・産業の発展という炳黙の「理想」に、男尊女卑の考えが根強く残り続けているという形で、前近代的な精神が見出されている。ミインメヌリなどの因襲と結び付いた前近代的精神を、この小説において最も極端な形で体现しているのは、エツプニの夫で「白痴」の夏燮である。「白痴アダダ」と「ミインメヌリ」は、「白痴者」が前近代の象徴とされている点も共通している。

両作品の異なる点については、「白痴者」が象徴する前近代の精神が、「白痴アダダ」では肯定的に、「ミインメヌリ」では否定的に語られる点が挙げられよう。前者では、失敗は少なからずしても、献身的で、愛情による結び付きを求めるアダダは肯定的に描かれる。後者では、エツプニを「棍棒や斧で」虐待し、夜毎に恐怖を与える夏燮は、「獸的本能」のもち主、妻に重労働を強いる「怠けもの」、「野蛮な」「鬼」などと否定的のみ描かれている。

そして、この相違点と関連して別の異なる点について述べると、「白痴アダダ」では、前近代的精神は特に何らかの旧制度と結び付けられておらず、新制度と資本への執着（新しい内面）のつながりが描かれている。それに対し、「ミインメヌリ」

では、男尊女卑という前近代性はミインメヌリという因襲と結び付けられている。つまり、古くからの制度と昔からの精神に、つながりがあるか否かという点も、異なっていると考えられる。この相違が、両作から汲み取り得るメッセージに大きく関わることは、言うまでもない。「白痴アダダ」が、変りゆく人心を見て、古き良き内面性を大事にしようとするのに対し、「ミインメヌリ」では、古臭い考え方を旧制度ごと変えようとしている。「ミインメヌリ」で古い価値観や制度を変えようとするのは、それらは鉄道などの新しい制度における組織などをも規定してしまうため、いつまでたつても精神面での刷新・近代化は望めないからだ。変えようとしているため、古い価値観に取って代わられるべき価値観＝近代的精神が示されているのも、「白痴アダダ」と異なる点と言えよう。最後に、「ミインメヌリ」が発表された雑誌は「白痴アダダ」と異なり、日本のものである点を挙げておきたい。「ミインメヌリ」に見られる男尊女卑と結婚制度の結び付きなどは、日本にもそういう点はあるが、この小説が日本の読者に教えるものは、それだけではあるまい。鉄道や工場、実業重視の学校の設置など、日本の植民地政策は物質的な近代化に偏り過ぎており、女性も男性も同じ「人間」として見るなどの思想については、伝えようとしていないのではないか。植民

地化することの是非については、ここでは問わないが、植民地政策により人々の生活上の負担が増える場合、男女どちらにより一層重くのしかかることになるのか。女性は戦前の歴史・資料に登場することが少ないため、植民地下の女性と男性の負担の割合については、はっきりとしたことは分からない。しかしながら、「ミインメヌリ」におけるエツプニ夫婦に關しては、明らかにエツプニの負担の方が重い。

「この河であたしが掘り集めた砂利だけでも、積めば山が一つ出来るわ。手の爪がむけるほど、夏は線路工夫達にからかはれながら草耚りをしたり、秋はこの河で砂利を掘り集めたり、そんなに働いてもあたしは食ふものは碌に食はれず、あの鬼どもに棍棒や斧で虐められるばかり……」泣き声で彼女はかう訴へた。

朝鮮の女性たちのためにも、新しい制度だけでなく、新しい価値観も伝えるべきではないか。本作は読者にこのように問いかけると考える。

注

注1 また、「ミンメスリ」の引用は朝鮮文人協会編『朝鮮国民文学集』(平成十二年九月、ゆまに書房)による。本稿における引用文中の傍線は全て筆者により、旧漢字は新漢字に改めてある。

注2 作者が生まれた平安北道宣川郡の南の島。

注3 平成二十二年五月、三省堂書店。

注4 昭和六十一年九月、未来社。

注5 三橋広夫訳、平成二十年十一月、明石書店。

注6 一九二〇年から始まる土地・農事改良事業。

注7 保坂祐二訳、平成二十年五月、明石書店。

注8 『海外事情研究』(平成十七年九月)。植民地朝鮮の新聞等における漫文漫画の研究論文で、そのうちの漫画「作品4」の説明である。

注9 本稿第二章で引用した「植民地朝鮮においての都市小市民の結婚および家族文化について」でも、教育が金銭への執着を植え付けた側面が指摘されている。

注10 拙著『日本近・現代文学における知的障害者表象』(平成二十四年三月、九州大学出版会)における次の指摘は、「白痴アダダ」にも当てはまる。

ドストエフスキー『白痴』の直接・間接の影響か、大正期以降の文学作品の「白痴」表象には、医学的・教育的な「白痴」(教育不能、理性や意志が薄弱、悖德的など)と、文学的な「白痴」(無欲、純粹、飾り気がない、真の幸せを知っているなど)とが入り混じったものが、いくつも見出される。

「白痴アダダ」では、近代的「白痴」概念で前近代的精神を

表現していると言える。前近代的精神は近代的精神から遡行的に見いだされるもの、つまりは近代の産物であるため、それを近代的「白痴」概念で表現することは背理ではない。

(こうち しげお・北九州市立大学文学部准教授)